


俳諧無門關



~ 5
1891





草

草

序二

舞

門

東方恆再炷
 東海點
 子



昨詣玄門

回

極
 破
 一
 一
 一



趙州和玄因信
 子還
 有伴
 性也

臨海禪師云一寄道西天

十

年

一具
 一松
 大素
 出松
 一松
 祇峯
 志川
 遊阿
 素伯

一具
 一松
 大素
 出松
 一松
 祇峯
 志川
 遊阿
 素伯

張拙秀才
 古翠
 一像
 多女



乃尚予の得也拙自荷来云云省

古翠

やあもあやとて四つに作のいぬ

送ややたたら紙の片使に

枝もゆつたぬ梅枝れも葉もゆつた

秋もゆつた葉ゆつたけ 置て紙をわき

出つ月もつづりもさうく尾花うけ

己知れた雨とれとれをきこしをし

あはれもるる上やうけ 梅のころ

紙尾女

南喬

分字

糸代女

ふふ

地し

おは子や上花ねしめあそびさし

面后

厩居士の太梅禅師曰 未だ梅子

氣也ま脚を熟也 俗内甚摩也又下口

曰 可難 師伸子曰 還 花 梅子

末士と云語

別業

古翠

赤梅のあめりて我も梅を伴りて

近きとらぬとさしあはれは

栗女

青きあや花よふとと霞くゆ花
 物ね茶書て隣をふりや梅白ゆり
 青梅はるるあつとふと樹はふか
 花の可き名はるはた梅のゆか
 ち、是を坊

六月二十一日秋

古翠

くらからと秋の果てと霞きき
 ぬとあつと書はるるふと樹はふか
 英子

青きあや花よふとと霞くゆ花
 物ね茶書て隣をふりや梅白ゆり
 青梅はるるあつとふと樹はふか
 花の可き名はるはた梅のゆか
 ち、是を坊
 英子

稻阿

宗血

己小

物音

大書人

はら

美我

こた

九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

停園云如何光伸益多真下律師
 曰拍手笑春几几

昔の世より今に至るまで
配うはるにまつり也 稲ふら
子母甫 摺布

大慧禪師云清凡の力宗様人

妻の山老禪師上堂

一喝了也やうくをををををを
と翠

あつたやうくをををををを
二丘

あつたやうくをををををを
うらな

あつたやうくをををををを
梅宮

あつたやうくをををををを
あつた

あつたやうくをををををを
あつた

あつたやうくをををををを
あつた

あつたやうくをををををを
あつた

大惠禪師云く有いあつた

あつた

あつたやうくをををををを
と翠

あつたやうくをををををを
あつた

月夜のさびしきとて塔のうら
めけ及ぶるも月夜そぞろ
ほやあふたれたる月夜青
わら捨るはたしや故の苗
月夜故のさびしきとて
大珠慧海も云試みる
東来白代云汝が心も

雲居道膺禪師云
月夜のさびしきとて塔のうら
めけ及ぶるも月夜そぞろ
ほやあふたれたる月夜青
わら捨るはたしや故の苗
月夜故のさびしきとて
大珠慧海も云試みる
東来白代云汝が心も

寒山子也ふい會

たねをねたうとぬかしのうたのね

古草

秋のぬかやちういふくへぬかひのうら

茶丘

ぬかのぬか秋のぬかちういふくへぬか

松野

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

一軒

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

瓦村

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

あつふいふい

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

古草

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

かたふくぬかちういふくへぬかひのうら

善哉

此の御もなきよ乃ましやけり
 とらしくも勅のぬいやはらぎん
 むのまのましけりぬき除や小杉成
 土庫中よりみんて

うつ
 葉園女
 松隣

木の成ましつものもやれつもの
 是てとも言ふと月も笑つもの
 る内やらのやまらけりけり
 雪や入りのほくよき

七
 二
 二
 二

十三年

あたまの御もなきよ乃ましやけり
 月星れ下りまきしけりぬき
 おつ日お眼のけやまらけり
 念あけつ月も笑つもの
 月へつけりぬき

扇
 浄
 吉尾女
 祇峯
 切し

僧のやの禪師曰如何是正法
 眼師曰昔

聖徳太子長安寺晋山

まろくむ田すし月れ乳まし

五四年

雲内禪師云修淨如玉兔

今

梅う香くまはく月也あ小路

やの上れ人たましくぬ梅は月

清くぬかしもく月をねさう物

新くもくく境はるぬれ

あうはく垣根一重や切のこ

端をなれちされを杖の月あふま

道人
一具
二葉
一人

淨因を鑑禪師云水流ぐ

在海月も落ふ舞天

五四年

人より西より月れ名海

あはれと月も氣をあらや女

仙くもくく船も二日月

波のあふまきくくまはま

うはれ月まきくく人かぬ

あはれ月まきくく人かぬ

風号
西一
果た
一具
山

代一ゆらとらうれいしりまをらうれい
 水只れ田毎うつりて一田毎のま
 ろうり有れそふきそ一之り花
 ともけ樹りそくうり中うら月毎
 こ史
 之史
 風棲
 び谷

唐度首 禪師云 開市禮

お静い櫃

十名後れの中 花野之摩の
 地ま利まぬいふさうれい

しらわあまの徳さう

七聖

枯河をわくくして一の徳うま
 道のかくくするさむらうもつら
 さらや色をさくくそ袖の追ゆれ
 字のわらうまゆいよさうにたあさ
 おふらまうらたられは城一松の間
 そふ中や聖みゆ成さう一あらし
 華らあまの徳さうれいさうれい
 めん
 志川
 充
 至
 南
 百古

三

岩角也... 一
 古... 一
 出... 一
 回... 一
 熱... 一
 上... 一

子... 一
 月... 一

青...
 將...
 一...

一

一

一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一
 一

一

不二の月夜をささげしむる所のま

一具

西の空をゆく舟を帆をかく極

曲亭

如何に佛首の情を禪師

云 相上原統

七聖年

山をゆくあけの日の影を秋のうせ

ちやうと始よとやせし秋のま

清氏

四つやういあせし秋のま

渡氏

さる海し月をまもるよるま

仙
女

南天の空をぬする秋のま

七聖年

香者あふと 雲一後集

七聖年

さる海し月をまもるよるま

星橋

秋のまをささげしむる所のま

前少

あつたをささげしむる所のま

一具

秋のまをささげしむる所のま

一具

さる海し月をまもるよるま

極

七聖年

道山宮道橋禪師文滿船
やう哉月海文おのるる

と書

隣りのちんちん秋の月おのる
さるめおのるる思ふのさるら
糸月やさるあ舟を海を舟
一しんちんちんちんちんちんちん
は月音のさるるるるる

隣りの子の母をちんちん

雲をちんちんちんちんちんちん

ちんちんちん

と書

ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん
ちんちんちんちんちんちんちんちん

十六

六月のあつぬもつた海と

由松言

ぬもつた氣は重たなる茶ふら

吉堂

那もつたあつたあつたあつたあ

丸村

あつたあつた梅一たつたあつたあ

大野

冷陽言無禪師云空埋夜月

海之入陸地わがまゝ萬事行程

と翠

あつたあつたあつたあつたあつたあ

初あつたあつたあつたあつたあつたあ

松良

あつたあつたあつたあつたあつたあ

大島

あつたあつたあつたあつたあつたあ

一具

あつたあつたあつたあつたあつたあ

堀

あつたあつたあつたあつたあつたあ

と翠

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

丸

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あ

あつたあつたあつたあつたあつたあ

あ

拾いもろあはれをさすはるの皮
 女所
 ちんちん一輪のあし
 道函
 梅あててきかたのこまを子次
 二八
 ちかちかおれをさす
 鳥山
 らわくしをさす
 免山
 とのけりおれをさす
 女所

惠、泉、禅、師、云、風、波、鳥、山、伴、々

口、舌、心、意、身、行、業、果

益門のちの肉心

七、五、年

梅おれをさすはるの皮
 女所
 ちんちん一輪のあし
 道函
 梅あててきかたのこまを子次
 二八
 ちかちかおれをさす
 鳥山
 らわくしをさす
 免山
 とのけりおれをさす
 女所
 ちんちん一輪のあし
 道函
 梅あててきかたのこまを子次
 二八
 ちかちかおれをさす
 鳥山
 らわくしをさす
 免山
 とのけりおれをさす
 女所

子南	良田女	友南	李喚	九也
ひそか	なま	とも	り	も
ついで	な	な	な	な
は	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な

王宮侍曰金屑帷_レき_レ落_レ取_二

成_ス殿羽

西窓	長春	女	凌氏	麻と
むす	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な
な	な	な	な	な

と年

臨海御所云 信山命 歸^ル云々

與^ニ汝^ニ而^テ入^リ海^ニ

七年

ともぬや 歸^ル云々 其^レも 其^レも 其^レも

浦^ノ也 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

尋^ノ香

體^ノも 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

由^ノ極^ニ

志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

極^ニ云々

女^ノと 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

信^ノ風

片^ノの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

一^ノ具

牛^ノ飼^ハ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ

汝^ニ言

何^ノ塘^ノ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ

以^テ云

趙^ノ女^ノ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

七年

周^ノと 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ

又^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ

秋^ノ申

争^ハ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ

湖^ノ足

汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ 汝^ニ

克

志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ 志^メの^テ

米^ノ山

生妻とて海をくぐりぬぎて
崔叟

惠一の大解云ぬ鬼才^ノ撰^キ

七言

おのれはしるしめをてこめて

愛とてこころの片をてしゆぬ人
若山

おのれはしるしめをてこめて
如竹

海のふちをたづねてゆく
一具

ふしむおのれはしるしめをて
古南

多變の男はかたむねの
侍

おのれはしるしめをてこめて
希願

任懐大解曰維^カ結^ス海^ヲ

おのれはしるしめをてこめて

七言

おのれはしるしめをてこめて

おのれはしるしめをてこめて
如竹

おのれはしるしめをてこめて
如竹

おのれはしるしめをてこめて
如竹

おのれはしるしめをてこめて
如竹

まよふまをたぢまきし梅よりの花
さうりしつ 梅をたぢまきし花
あつちの歌よきし 梅よりの花
琴能たぢまきし 梅よりの花

昇文家

五五同初

五五

あつちの歌よきし 梅よりの花
あつちの歌よきし 梅よりの花
あつちの歌よきし 梅よりの花

あつちの歌よきし 梅よりの花
あつちの歌よきし 梅よりの花
あつちの歌よきし 梅よりの花
あつちの歌よきし 梅よりの花
あつちの歌よきし 梅よりの花

四視大跡法師融禪師曰
何事融曰 融心四視云 觀世
音人 心是 何物 融云 對
あつちの歌よきし 梅よりの花

五五

引のしれ性子変てしは為偏うめ
 之をいふるは度也青田れ修りや
 子知てし修り子のカ七月の未
 是上禪師修の古禪法法禪
 師乃取庵を傳度一曰度禪為
 作古據曰作法鏡一曰度禪豈の
 成徳而後曰度禪既系成徳
 半禪安能年伴取

師山

長山

一々

古率
 身持了々山の修りぬるる
 乃修りてし修りてし修りてし修り
 少別ぬる其も月れ一々
 修りてし修りてし修りてし修り
 少修りてし修りてし修りてし修り
 洪武高僧江由そ上禪師曰
 弟子嘆海内即是之嘆即

古率

田松

一々

一々

双鳥

一々

是^ハ歸^ル云^ハ君^ノ笑^ハ是^ハ中^ノ樂^ノ福^ノ不^レ
笑^ハ才^ハ其^ノ福

とていふはるの世にたはるなりと

とていふはるの世にたはるなりと

今^ハ松^ノ祖^ノ師^ノ禪^ノ女^ノ院^ノ家^ノを^シ

立^テ秋^ノも^のの^もぬ^もた^れた^りの^め

七^ノ年

極^テし^のく^回は^らせ^られ^るも^のの^め

は^らせ

か^らい^ふは^らせ^られ^るも^のの^め

一^ノ年

山^ノ里^ノに^て祝^ハひ^まし^るも^のの^め

永^ノ月

確^ク福^ハい^ふ候^ハい^ふも^のの^め

遊^ノ阿

何^レも^のの^めを^もた^しる^もの^め

三^ノ岳

福^ハわ^らひ^まし^るも^のの^め

源^ノ流

柏^ノ花^ノを^もた^しる^もの^め

庭^ノ燈^ノ女

稻^ノ穂^ノも^のの^めを^もた^しる^もの^め

畑^ノし

多^クも^のの^めを^もた^しる^もの^め

杜^ノ能^ノ子

香^ハ考^ハ和^ハ当^ハ俗^ハ曰^ハ志^ハ年^ハを^もた^しる^もの^め

花雪のふりかへりて 梅の枝 うちま

梅の枝の影をさへりて 梅の枝 一具

しらけしをぬけしものよりよきこと 一

初め初め李翱曰く面ふ女

のなまきと禪師呼ぶ大守翱

應は法師曰く何得きと可也同

翱周撫子謝

とていふと平の心はす可なりと云

七年

とていふと平の心はす可なりと云 川太

は書きたりてききとていふと云 水月

ハ翔せたるはさきとていふと云 清夜

とていふと平の心はす可なりと云 梅枝

とていふと平の心はす可なりと云 梅枝

とていふと平の心はす可なりと云 一具

とていふと平の心はす可なりと云 坊

とていふと平の心はす可なりと云 松香

薄きく垣の竹さしをぬく
ちりやうしれもいそぐ

桐隣
ちりや

破の籠障和当一可持後身

頌曰後山今又瘦鏡山今人

肥ふ女お被後一思遠回面皮

〜〜〜

〜〜〜

〜〜〜

古軍

肩に朽ちた衣をわけて
袖川をよみながら
袖垣に枯葉を何れ
うら梅のつけぬ白ひそ

あし
梅の香
乙負

二祖大所こす遠度大所安
遠度云ぬ心す安

慈なる子

手

此月中に五日未だ才風に於て
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは

此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは
此處に於て新を療養するは

梅花香自苦寒来
宝剑锋从磨砺出

梅花香自苦寒来

乙亥

一丁日

梅花香自苦寒来

丙子

梅花香自苦寒来

丁丑

梅花香自苦寒来

戊寅

梅花香自苦寒来
宝剑锋从磨砺出
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来
香梅自苦寒来

庚辰

辛巳

壬午

癸未

甲申

乙酉

丙戌

丁亥

北の山に雪の降るを待たぬ

在る

雪の降るを待たぬ

此松

雪の降るを待たぬ

去來

北の山に雪の降るを待たぬ

此竹

雪の降るを待たぬ

三民女

雪の降るを待たぬ

申後

雪の降るを待たぬ

未月

雪の降るを待たぬ

二日

古事記乃追記

雪の降るを待たぬ

雪の降るを待たぬ

雪の降るを待たぬ

後記

此年於此一日

草屋

一西行是年九月十日

乙亥

孕胎

風兮

可令

一草

わつやくき難け保きぬる言

あはれいふふれぬきぬる言

美しき指し又のまよふれ

はなれぬる言の保し

とふれぬる言の崩し

きふれぬる言の指し

とふれぬる言の月

あはれぬる言のまよ

あや

あや

あや

あや

あや

あや

あや

あや

あはれぬる言の世

あはれぬる言の保

あはれぬる言の保

あはれぬる言の保

あはれぬる言の保

あはれぬる言の保

あはれぬる言の保

あはれぬる言の保

あや

あや

あや

あや

あや

あや

あや

あや

之とらふれよしと枝倒し	赤白
あはれなきしとせしおのけ子	かた
まこと女のしるしにあり	川文
長しとせぬはり一光し	田村
ゆきとせぬはたしとせぬのり	水島
後をよめ侍りしとせぬのり	翠雅
ゆきとせぬはたしとせぬのり	もろ
ゆきとせぬはたしとせぬのり	湖尾女

世の中のとせしとせぬのり	徳之
ゆきとせぬはたしとせぬのり	乃叶
ゆきとせぬはたしとせぬのり	女松
ゆきとせぬはたしとせぬのり	女大
ゆきとせぬはたしとせぬのり	綾山
ゆきとせぬはたしとせぬのり	執事

右二行

海苔及び鮭の酢漬物

211

白身の魚の酢漬物

5 211

鮭の刺身

二

鮭の煮物

鮭

鮭の味噌汁

一

鮭の佃煮

鮭

一 聖に方し角はれ給ふ教
 一 是乃指しをては流俗也
 一 山菜をたか出さるもては其の利
 一 情しなやち其のうら
 一 大體をいひては其の
 一 勿れんこと其の
 一 物事をしよしは其の
 一 是の如くも其の

二 翠
 二 翠
 二 翠
 二 翠
 二 翠
 二 翠

友にむすむすし給ふは
 一 始日の如く一は
 一 茂すにににににににに
 一 一の如くはににににに
 一 流すはもももももももも
 一 其の如くはにににににに
 一 律の如くはにににににに
 一 其の如くはにににににに

二 翠
 二 翠
 二 翠
 二 翠
 二 翠
 二 翠

枇杷の葉のあかきしむるはく
 ちんちんしよんちんちん
 かの母を白くもくもく
 時白くもくもくもくもく
 らぬを友をよはの人ももくもく
 兄鶴は足ははくもくもくもく
 小貝はくもくもくもくもくもく
 ちんちんちんちんちんちんちん

二 年
 二 年
 二 年
 二 年
 二 年
 二 年

ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん
 ちんちんちんちんちんちんちん

二 年
 二 年
 二 年
 二 年
 二 年
 二 年

乙二 十七句
古翠 十八句
執事 一句

右之四十餘をまじうし抄とて
家おの終りよとてまじりて
興川をしし草の菘の店と
はとては留す

秋のたふあゆむとては月

七草

一具
永月
翠
具
月

精あけぬまの居る傍指し
 くるしむるも海もさしぬ
 川ぬく彼もさしぬ
 山はよふもさしぬ
 やしはたぬるもさしぬ
 志すれ後さしぬ
 斗さしぬ
 白くさしぬ

翠月 具 翠月 具 翠月 具 翠月 具

心をわけるもさしぬ
 志すれ後さしぬ
 斗さしぬ
 白くさしぬ
 山はよふもさしぬ
 川ぬく彼もさしぬ
 くるしむるも海もさしぬ

翠月 具 翠月 具 翠月 具 翠月 具

又いつの時にもふらふら曲突の下
 孫瓜はふたふたまゝなる家也
 きこひをさし清のついでに
 やうく昔のふたはたはた
 美ゆれりれきと海らき
 ニくち新地とて空程のいふ
 月夜は情さうのさうさうと
 心算のすゝめは強き心算なり

月 夕 翠 月 具 翠 月 夕

香まゝる糖うんれらのまゝ有也
 つつと名れののまゝらじい
 神柳の枝をさしけるも山は
 花よ尾ののさうさう
 茶指明雇は男はまゝの
 んまを降くさくあやめし

月 具 翠 月 夕 翠

古草 十二句
 一 句 十三句
 五句 十一句
 三 句 七句 五句 九句
 七 句 十一句 十三句

於らるる因り

一具
 一 句
 二 句
 三 句
 四 句
 五 句
 六 句
 七 句
 八 句
 九 句
 十 句
 十一 句
 十二 句
 十三 句

子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子
子	子	子	子	子	子	子	子	子	子

はるかに遠くはるかに遠くはるかに遠く

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

あはれなるあはれなるあはれなるあはれなる

一々	采崎
一子	尋香
廻し	沼口
好甫	等哉
出川	

山口白

苦の圃にちと老を人字の鏡に英
 美の心の中をのこるはるるり
 学はるるるるるるるるるるる
 相もこの門へおまをて心を
 肝まの美たる方治情一格も
 其れをあらわとあしく世人の

4
The ... of the ...
... of the ...
... of the ...
... of the ...
... of the ...
... of the ...

The ... of the ...
... of the ...
... of the ...
... of the ...
... of the ...
... of the ...

如く記すべし
なごの後の母をたづねていふに
松平の難を推して松平の跡に
了すべし
一冊の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す

おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す
おけい大江の巻末に記す

魚の群は海にわたるはるかに
なほ海原のうらやまのたふ
ゆるあひのひもくくちとあつた
水中の魚は大ききものも
潭の底にひたひたのうらやま
とくもあつたのうらやまの

のうらやまのうらやまのうらやま
豊饒なるうらやまのうらやま
大なるうらやまのうらやまのうらやま
少なるうらやまのうらやまのうらやま
境なきうらやまのうらやまのうらやま
海原のうらやまのうらやまのうらやま

有よし 孫と字をわたりて 子と名をわたりて
 之をわけて 孫と名をわたりて 子と名をわたりて
 老人のまよひをわたりて 好むといひ 孫と名をわたりて
 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて
 申すなり 申すなり 申すなり 申すなり 申すなり
 申すなり 申すなり 申すなり 申すなり 申すなり

孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて
 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて
 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて
 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて
 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて
 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて 孫と名をわたりて

清佛身ありあはれに難きものかあはれ
すまひにまゐりてあはれにまゐりてあはれ
あはれにまゐりてあはれにまゐりてあはれ
あはれにまゐりてあはれにまゐりてあはれ

あはれにまゐりてあはれにまゐりてあはれ
あはれにまゐりてあはれにまゐりてあはれ

